

諸菩薩者各以二行満足。一切菩薩普賢行願。諸聖教者唯以二理説盡。一切諸本末體用。於人名三所證。對教名三所詮。依實尋體。圓滿具足無有増減。所謂不可思議之法也。超過尋思言議道。故。然者立名分義導機之方便也。離言離相自證之實理也。是以行者歸觀音。赴大悲門。所持之法大悲神呪也。當來同法大悲行也。雖稱觀音大悲。實聽欲住不思議。是又大師釋迦牟尼寂默之體。究竟轉依之大牟尼法也。問。謂凡夫之隔大聖者。只思議之隔不思議也。若不離分別不能入彼不思議。纔讀教文。輒讀此妙。於末代慧解都非境界。赴過分門哉。答。如予愚癡懈怠最下機根。還以不思議爲一分。若守次第作法論善惡因果。雖經多生雖積劫數。以自力正入大乘事如無其期。大聖若從一分縁爲我可他益。只在不思議一門。除之外未_レ知_レ餘道。問。佛界平等也。與益不擇。何故多分以思議門次第漸漸引攝。少分以不思議門橫施奇特益乎。若云其頓入之人世世之中作不思議觀念等。還又爲機根。味_レ勝。而剩以機之最下爲故超餘人。竊期不思議益已以欺誑。雖欣豈得乎。我懈怠無慚。常臥病席。號憑不思議。是佛法之疵也。莫復再説。設雖不出言。豈非邪見哉。答。所責可爾。然而非如疑問。顧身已失所期。纔所殘只大聖不思議許也。其不思議亦不_レ知_レ可通之道。然者今所_レ言者。似嬰兒童子之戲。強莫_レ之。

諸菩薩のおのの一行を以て満足するは、一切菩薩の普賢の行願なり。諸の聖教の唯だ一理を以て説き尽すは、一切の諸の本末・体用なり。人に於ては所証と名づけ、教に對しては所詮と名く。実に依りて体を尋ぬれば、円満具足して増減有ること無し。いわゆる不可思議の法なり。尋思言議の道を超過するが故なり。然れば名を立て義を分かつは機を導く方便なり。言を離れ相を離るは自証の實理なり。是を以て行者は觀音に歸し大悲門に赴く。所持の法は大悲の神呪なり。當來の同法は大悲の行者なり。觀音の大悲を稱ふと雖も、実に總じて不思議に住せんと欲ふ。是れ又、大師釈迦牟尼寂默の体なり。究竟轉依の大牟尼法なり。問う。凡夫の大聖に隔つと謂ふは、只、思議の不思議に隔つなり。若し分別を離れざれば彼の不思議に入ること能わず。纔かに教文を読み、輒く此の妙を読めども末代の慧解に於ては都て境界に非ず。過分の門に赴かんや。答ふ。若し予の如き愚痴懈怠の最下の機根は、還りて不思議を以て一分の縁と爲す。若し次第作法を守りて善惡の因果を論ぜば、多生を経ると雖も劫數を積むと雖も、自力を以て正に大乘に入る事、其の期無きが如し。大聖若し一分の縁に従りて、我が爲に他益を可とするは、只、不思議の一門に在るか。之を除きて外に未だ余道を知らず。問ふ。仏界は平等なり。益を与へて扱はず。何が故に多分に思議門を以て次第漸漸に引攝し、少分に不思議門を以て横に奇特の益を施すや。若し其れ頓入の人は世世の中に不思議の觀念等を作すと云ひて、還りて又機根と爲すは勝に味し。而して剩へ機之最下を以て故と爲すは、余人に超えたり。窃かに不思議の益を期すは、已に欺誑に似たり。欣ふと雖も豈に得んや。我は懈怠無慚にして常に病席に臥す。不思議を憑むと号ぶは、是れ仏法の疵なり。復た再び説く莫かれ。設ひ言を出ださずと雖も、豈に邪見に非ずや。答ふ。所責はしかるべし。然れども疑問の如きには非ず。身を顧みれば已に所期を失へり。纔かに残る所は只、大聖の不思議許なり。爲言。其の不思議亦通すべきの道を知らず。然れば今言ふ所は、嬰兒童子の戯れに似たり。強ちに之を難する莫かれ。

*尋思言議の故なり『成唯識論』の言葉

*大牟尼は佛の異名

*輒は俗字・すなはちたやすくの意

*欺誑はあざむきたぶらかす

*爲言は①偽りのことば。つくりばなし。偽言。讒言。②言いくさ。口実。

問。今歸依神呪。以之欲備觀音值遇之正業。若順此門乎。將別趣歟。答。秘密神呪。不思議中之最不思議也。言秘密者。即不思議之異名也。此神呪心者。法體不思議。實性不思議。言說不思議。功能不思議。利益不思議。所謂佛果不思議。衆生不思議。正業不思議。加持不思議等故也。故一誦實能滅四重五逆。又始得此呪超生死四萬劫。又皆爾也。若雖一時雖二分。依佛法心澄。是信心所起也。十一善中若隨一起。餘數亦俱。又心靜之時散亂不起也。遍染既闕。餘煩惱亦不生歟。

元享三年正月廿九日令書寫了

私書人之
菩提心論云。於内心中觀日月輪。由作此觀照見本心湛然清淨。猶如滿月。又云。妄心若起知而忽隨。妄若息時心源空寂。萬德斯具。妙用無窮。云。又云。爲一切有情悉含普賢之心。我見自心形如二月輪。何故以二月輪爲喻。謂滿月圓明體則與菩提心相類。云。表導云。一爲□□無染也。於中有四。一自性相。二所住味相。三隨順過失相。四隨順出離相。云。金剛經導無着論云。一切有為法。如星翳燈幻。露泡夢雷雲。應作如是觀。隨順過失相現在行。

問ふ。今、神呪に帰依し、之を以て観音值遇の正業に備へんと欲す。若し此の門に順はんか、將別の趣か。答ふ。秘密の神呪は、不思議中の最も不思議なり。秘密と言ふは、即ち不思議の異名なり。此の神呪の心は、法体不思議・実性不思議・言說不思議・功能不思議・利益不思議にして、いわゆる仏果不思議・衆生不思議・正業不思議・加持不思議等の故なり。故に一誦にも実には能く四重五逆を滅す。又、始めて此の呪を得れば、生死四万劫を超ゆる。又、皆爾なり。若し一時と雖も、一分と雖も、仏法に依りて心の澄むは、是れ信心の起す所なり。十一善の中の若し随一も起こらば、余の數も亦、俱なり。又、心靜かなる時は散亂起らざるなり。遍染既に闕く、余の煩惱亦、生ぜざるか。

元享三年正月廿九日書写しめ了ぬ

私書人之
菩提心論に云く。内心中に日月輪を觀ず。此の觀を作すに由て本心の湛然として清淨なるを照見す。猶、滿月の如し、と云々。又云く。妄心の若し起こるを知りて随う勿かれ。妄若し息む時、心源空寂なれば、万德斯れ具して妙用窮まり無し、と云々。又云く。一切有情の爲に悉く普賢の心を含む。我自心を見るに形月輪のごとし。何故に月輪を以て喩と爲す。謂く滿月円明の体は則ち菩提心と相ひ類たり、と云々。表導に云く。二に□□無染と爲すなり。中に於て四有り。一に自性相。二に所住味相。三に隨順過失相。四に隨順出離相、と云々。金剛經の導きに無着論じて云く。一切有為法は。星翳燈幻。露泡夢雷雲の如し。応に是の如く觀を作すべし。

*四重||殺生・偷盜・邪淫・妄語

この『不思議』は出典に示すように『増補改訂日本大蔵経』第六十四巻において「信願上人小章集」に収録され良遍の著作としてされているのだが、その内容から言っても北島典生『信願上人小章集』の研究』に指摘されるように、おそらく貞慶の作に間違いはないと思われる。

語注

①普賢行 〓華嚴の修行。一行を実践すれば、一切の行を具することになる。

*普賢行願 〓①普賢菩薩の行と願。②還相の廻向。↓還相廻向(『普賢菩薩行願讚』大正十 pp.880-881)

*普賢菩薩 〓文殊菩薩と並んで釈迦仏の脇侍として、仏の理・定・行の徳を司とする。無量の行願を具足

して、あまねく一切の仏土に示現する菩薩のこと。慈悲の実践者。文殊菩薩が般若の智を代表するのに対して、普賢菩薩は行願の面を代表している。…中略… 普はあらゆるところに遍じている意。賢は最も妙善の意。さとりを求める心がおこす願や行がすべて平等で、あらゆるところに遍じ、その心が妙善である菩薩の意(一行の積)。

②十一善 〓唯識で現・當二世を利益し、總て有爲の善(生滅變化ある世界の善)の體たる十種の心作用をいふ。信・精進・慚・愧・無貪・無瞋・無癡・輕安・不放逸・行捨(沈鬱と浮躁を放れ 平靜なる心)・不害のこと。

③散乱 〓随煩惱の中の大随煩惱のひとつ。掉挙・昏沈・不信・懈怠・放逸・失念・散乱・不正知。この八つの煩惱の心所は「染心に遍ず」といわれる。

④金剛經導 〓『金剛經論』無著造のこと。『金剛般若論』また『金剛般若波羅蜜經論』ともいう。しかし同名の弥勒の頌十世親の積があり、引用された「一切有為法……」の經文は、こちらの中にある。般若經本来の思想が説かれるが、用語および解釈の仕方において、唯識派的であるところが散見される。その代表がこの偈文である。經文の「一切有為法 如星翳燈幻 露泡夢雷雲 応作如是觀」の偈の解釈に際して、弥勒の頌に「見相及於識 器身受用事 過去現在法 亦觀未來世」とある部の解釈に「子時における阿頼耶識、一切法のために種子根本となる」(参照『大蔵経全解説大事典』・大正二十五 pp.796-797)